

## おわりに —名古屋大学キャンパスの歴史的特色と課題—

### ◆早いキャンパス一元化

以上、名古屋大学キャンパスの歴史について、学部を中心にみてきました。これを踏まえ最後に、名古屋大学キャンパスの歴史的特色と今後の課題についてふれておきたいと思います。

まず、キャンパスの歴史的特色の第一は、戦前からある他の帝国大学、特に東北・大阪・九州に比して、主要キャンパスの一元化が早くに行われたことがあげられます。

東京大学の主要キャンパスは本郷と駒場、京都大学は吉田と宇治、北海道大学は札幌と函館と、二ヶ所に集中しています。いずれも歴史が古く（北海道大学は札幌農学校時代を含めます）、創設当初から、あるいは戦前までにはキャンパスが一元化していたことが大きな理由です（駒場・函館は敗戦後に包括した学校のキャンパスですが、一校だけのキャンパス包括ですみましたし、宇治は包括校キャンパスではありません）。

一方東北大学の主要キャンパスは片平・川内―青葉山など四地区、九州大学は箱崎・馬出など四地区、大阪大学は吹田・豊中・中之島の三地区と、新制地方大学と同様、いわゆる「タコ

足大学」の状態を脱しきれていません。東北大学の創設は一九〇七（明治四〇）年、九州大学は一九一一（明治四四）年、大阪大学は一九三一（昭和六）年と、八高や名高商や鶴舞キャンパスの創設と同じ頃です。それは前述したように都市において市街地が拡大した明治末から昭和初期でしたので、敷地面積にもおのずと限界がありました。また戦後の包括校も複数あり、それも市街地内にあつた当時のキャンパスが分散されたままの包括でした。郊外にキャンパスができたのは、九州大学が筑紫の一九八〇（昭和五五）年、大阪大学が吹田の一九六七（昭和四二）年でした。しかし、それでも旧キャンパスから新キャンパスへの全面移転ではなく、一元化はされていません。

名古屋大学もこれまでみてきたように、他の大学と同様複数の包括校がありました。そのため新制発足時期には、やはり「タコ足大学」でした【図21】（次頁）。しかしそれにもかかわらず早くに東山キャンパスに集結できた理由は、創設が一番遅かったため、当時一応の拡大をみた新興市街地の中での新キャンパス建設さえ無理であり、さらにより郊外に敷地求めたという点にあると思われる。一九三九（昭和一四）年という戦時下の創設が、さらにより郊外へキャンパスを求めざるをえなくなり、それが逆に広大な敷地取得を可能にしたといえます。また、優秀な事務局による「建設交換移転」という発想も一因といえましょう。どちらも困難を転じて、逆に一つの先見性という結果になったのです。しかし、現在では東山キャンパスも手



狭になっています。東京大学の柏キャンパスのように、新キャンパスを必要とする可能性もあり、再びタコ足大学に戻らざるをえなくなるのも、そう遠いことではないかもしれません。

#### ◆「緑の学園」

特色の第二点は、創設当初から「緑の学園」を目指してきたことがあげられると思います。緑の山の中に建設されたため、現在の事務局棟と農学部棟を結ぶラインから東南、付置研究所がある地域には、いまだ昔からの森林が残っています。また、キャンパス建設が始まった昭和一〇年代からある理系地区も当初は樹木が伐採されましたが、四谷通から東側の地区はすぐに新たな植林が行われたため、「緑のトンネル」に代表されるように、緑に覆われたキャンパスとして復活しています。グリーンベルトも、四谷通から西側の地区は、両側道に植えられた樹木が三〇余年を経た現在大きく育ち、中心にある中央図書館を含めて、緑の美しい景観をみせています。

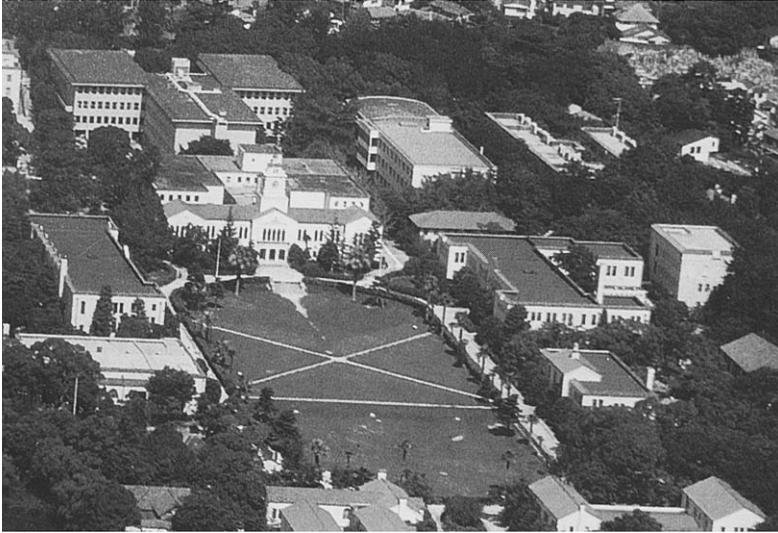
しかし一方で、昭和三〇年代に建設された文系地区や、建物建替がめまぐるしい四谷通から西側の工学部地区は、樹木が著しく少ない状況です。また鶴舞・大幸両キャンパスも同じく緑が少ないのですが、ただしこれは医療技術との関係から緑を押し込んでいるのかもしれない。昔地下鉄建設が終わった後の、四谷通から豊田講堂までのグリーンベルト東側の整備を含め、昔

の「緑の学園」構想をもう一度ここで思い浮かべ、さらに深い緑に覆われたキャンパスを今後検討していただければと思います。名古屋大学の学章は緑色で、また体育会の機関誌も『濃緑』という名称であり、名古屋大学のスクールカラーは「緑」といえます。この意味を今改めて考えて直してみる時期ではないかと思えます。

#### ◆歴史的建物景観の保存

特色の第三点は、歴史を残している建物景観がほとんどないことです。戦前からの歴史を持つ瑞穂・桜山、あるいは敗戦後の豊川・名城・安城各キャンパスは、校舎とともにすでになくなっていきます。東山キャンパスも戦前に建てられた木造校舎はすでになく、さらに戦後に建てられた鉄筋建築さえも新たに建て替えられようとしています。名古屋大学で一番古い歴史をもつ鶴舞キャンパスでも、戦災にあつたことにもよりますが、その戦災で残つた図書館も取り壊されてしまいました。古い歴史の名残りを伝えているのは門柱と外塀の一部だけです。

戦前からの歴史をもつ大学の多くが歴史的建物を一部保存しているのとは対照的に、名古屋大学はその歴史の浅さから、逆に歴史的建物景観が保存されていないという現象がおきています。早いキャンパスの一元化もこれを促進させた一因と思われるかもしれません。もちろん理系は急速に研究が変化しているため、施設・設備を絶えず更新しなければならないという現実を背負ってい



【図 22】 関西学院大学キャンパス

景観は一見名大と似ていますが、中央芝生を取り囲む古くからの建物を残しており、新しい鉄筋建築をそのさらに周辺に、旧建物と調和する景観になるように建てられています。

ます。また前述したようにこの地区に緑が少ないのも、建替のため致し方ないという側面はあります。

ですからすべての建物を建替せず  
に保存し、新規に建物を建てろという  
現実離れた提案をするつもりはあ  
りません。しかし建物自体が大学の歴  
史を語っていることもまた一つの事  
実です。歴史的建物景観が大学のアイ  
デンティティの一つになるのです。

たとえば私学の事例になりますが、  
関西学院大学や神戸女学院大学では、  
キャンパスの中央に緑地帯を設けて  
おり、その点は東山キャンパスと似た  
配置になっていますが、その周りに歴  
史の古い校舎を残しています。かつそ

のまわりに増築された新しい鉄筋建築は、キャンパスのこの歴史的建物景観と調和するように配慮されています【図22】（前頁）。国立大学がどこまで、この私立大学のようにできるかはわかりませんが、少なくともその努力はしてみてもよいのではないでしょうか。たとえば京都大学は新規の鉄筋建築でも煉瓦色を基調としており、先の関西の二つの私立大学同様に、旧建物との調和をはかっています。

#### ◆名古屋大学キャンパスマスタープランの課題

名古屋大学の場合、豊田講堂から西へのびるグリーンベルトと、その両脇を囲む工学部1・2・3号館、経済・文・情報文化学部の各建物は、みごとに美しい景観をみせています。このことは「名古屋大学キャンパスマスタープラン<sup>97</sup>」にも、「グリーンベルトは、名古屋大学の顔として大切な存在であるので、（中略）向かい合う文系施設との景観調整を常に念頭に置く必要がある」と書かれています。この六つの建物の各玄関には、最近の建物にはあまり見られない半円形の手寄せがあり、特に築五〇年を経る工学部1号館南側建物は東山キャンパスで一番古い鉄筋建築であり、先の本方さんによれば、その玄関はネオクラシズムに通じる意匠であるといわれています【図23】。前述したように現在1号館の北側建物は壊され、新たに高層建築（新総合研究棟）が建てられようとしていますが、東山キャンパスで一番古い南側建物はま



【図 23】現在の工学部1号館南側建物  
東山キャンパスで一番古い鉄筋建築です。

だ残っています。これらの建物を、単なるきれいな景観としてだけではなく、名古屋大学の歴史を伝えていく歴史的建物景観として、今後永く残していつてもよいのではないのでしょうか。

またキャンパスマスタープランには「グリーンベルトに面した建物は低層に抑える」との表現があるのみで、建物保存にはふれておらず、歴史的建物景観の保存という考え方は記されていません。また「開放的で緑豊かなキャンパスの伝統の尊重」「緑の保全・創出」という概説的な説明はありますが、先の『名古屋帝国大学敷地内植樹調査報告』のように、緑についての詳細な調査をし、その上でどこに緑を植えていくかという今後の構想についても、具体的に指摘されていません。これらはおそらくこれから具体的に詰められていくものと思われれます。

たしかに「老朽化、狹隘化、旧態化が著しく（中略）相当に時代遅れのものとなっている」とあるように、建築基準法の問題や内装施設の不十分さ、さらに理系おける研究の急速な変化という、現実的課題があることも考慮はしなければなりません。ですから、スクラップアンドビルト方式を全面的に止めようというわけではありません。しかし一方で、前述したようにその歴史的建物景観の保存と「緑の学園」を、やはりいま一度真剣に考え直してみてもよいのではないでしょうか。

#### ◆その他の施設と豊川キャンパス

なお、名古屋大学にはこのほかにもまだ、全国に多くの施設をもっています。その中でキャンパスと呼んでもよいと思われるものに、あと豊川キャンパス（豊川市穂ノ原、前述の豊川キャンパスとはさらに別）があり、ここには太陽地球環境研究所などがあります。

今回は学部を中心としたキャンパスの歴史について述べましたが、別に事務局・独立大学院・附置研究所・各センター・豊田講堂・古川総合資料館・中央図書館・グリーンベルト・学生厚生施設などを取り扱った続編も考えております。豊川キャンパスについても、その際に改めて触れてみたいと思っております。

## 〈引用文献・参考文献等〉

- 『名古屋大学五十年史 通史一・二』（名古屋大学、一九九五年）
- 『名古屋大学五十年史 部局史一・二』（名古屋大学、一九八九年）
- 『写真集 名古屋大学の歴史 1871～1991』（名古屋大学、一九九一年）
- 『名古屋大学一覽』（各年度）…〔図7〕
- 『名古屋大学概要』（各年度）
- 『名古屋大学要覽』（各年度）…〔図17・21〕
- 『名古屋大学のプロフィール』（各年度）
- 『校友會雜誌 第參拾四號 新築開校記念號』（愛知醫學專門學校々友會、一九一四年）…〔図1〕
- 『自明治六年至同十三年 愛知縣公立病院及醫學校 第一報告』（編輯局）…〔図2〕
- 『愛知縣立醫學專門學校愛知病院新築落成式紀念帖』（愛知縣立醫學專門學校愛知病院新築落成式協賛會、一九一五年）…〔図4〕
- 『（大正二年十二月） 愛知縣立醫學專門學校及愛知病院一覽』…〔図5〕
- 木方十根「愛知医科大学時代の施設拡充について」（『名古屋大学史紀要 第七号』名古屋大学史資料室、一九九九年）…〔図5〕
- 木方十根「旧愛知医専・愛知病院の門と扉」（『名古屋大学史ニュース 第六号』名古屋大学史資料室、一九九九年）

- 『名古屋大学医学部九十年史』（名古屋大学医学部学友会、一九六一年）
- 『名古屋帝國大學一覽 昭和十七年』（名古屋帝國大學）…【図10】
- 『昭和十七年二月 名古屋帝國大學概況』…【図11】
- 澁澤元治『我等の學園』（一九四三年）
- 本多静六・稲垣龍一『名古屋帝國大學敷地内植樹調査報告』
- 木方十根『創設期の東山キャンパス計画 — 營繕顧問・内田祥三の資料を中心に—』（『名古屋大学史紀要 第六号』名古屋大学史資料室、一九九八年）
- 須川義弘『半生を顧みる』（須川徳子、一九八二年）
- 『平成4年度キャンパスプラン委員会報告 名古屋大学工学部施設整備構想』（工学部キャンパスプラン委員会、一九九三年）…【図13】
- 『伊吹おろしの雪消えて — 第八高等学校校史—』（財界評論新社、一九七三年）
- 『名古屋大学経済学部五十年史』（財界評論新社、一九七七年）
- 『岡崎高等師範学校誌』（岡崎高等師範学校学生会、一九五〇年）…【図15】
- 『新修名古屋市史 第六卷 附图』（名古屋市、二〇〇〇年）…【図19】（実物は名古屋市政資料館所蔵）
- 『名古屋大学農学部創設について』（名古屋大学農学部創設後援会、一九五二年）
- 牧島久雄『名古屋大学農学部学生のガイダンス 昭和37年3月』
- 『関西学院大学 文学部60年史』（関西学院大学文学部、一九九四年）…【図22】

『名古屋大学キャンパスマスタープラン'97』(名古屋大学、一九九七年)



東山キャンパス現況図



著者略歴

神谷 智 (かみや さとし)

一九五七年、愛知県生まれ

一九九一年、名古屋大学大学院文学研究科博士課程（後期課程）単位取得退学

現在、名古屋大学大学史資料室助手

専攻 記録史料学

名大史ブックレット2

名古屋大学 キャンパスの歴史1 (学部編)

二〇〇一年二月二〇日 第一刷発行

二〇〇一年九月一〇日 第二刷発行

著者 神谷 智

編集発行 名古屋大学大学史資料室

〒464-8601 名古屋市中種区不老町

電話 〇五二(七八九)二〇四六

印刷所 株式会社 クイックス

〒456-0004 名古屋市中熱田区桜田町一九一〇

電話 〇五二(八七二)九一九〇





表紙写真：緑のトンネル  
工学部5号館付近から四谷通方面  
を望む（本文29～30頁参照）。